

## 第17章 神武東征（逃亡）（佃説）

### 1 伊都国と倭国の戦い

#### (1) 「神武逃亡」

卑弥呼が死去して次の男王が立つと「伊都国」は「倭国（邪馬壹国）」に対して叛乱を起こす。「相誅殺」である。

しかし伊都国はまたもや倭国に敗れる。叛乱を平定した「倭国」の支配はさらに厳しくなる。伊都国の人々は「平安な暮らし」が出来なくなる。「伊都国」は「平安に暮らしが出来るような土地を探す」ために「伊都国」を捨てて東へ向かう。これが「神武東征」である。

□「神武東征」は「神武逃亡」である。

#### (2) 伊都国の人団（逃亡の検証）

『三国志』倭人伝は「女王国より以北の国々（伊都国王権）」の戸数を記す。

##### ○「女王国より以北の国々」の戸数

- 対海国（対馬） 千余戸
- 一大国（壱岐） 三千許家
- 伊都国 千余戸
- 奴国 二万余戸
- 不彌国 千余家

伊都国の人団は「千余戸」とある。支配している国々よりも戸数は少ない。

『魏略』は伊都国の人団は「戸萬余」と記す。

##### ○伊都国の人団

- 『魏略』 …… 戸萬余
- 『三国志』 …… 千余戸

『魏略』の方が『三国志』よりも先に成立している。

『魏略』の「戸萬余」の方が伊都国の人団にふさわしい。伊都国の人団は「萬余戸」から「千余戸」に減少している。

戸数が10分の1に激減している。住民の9割が居なくなっている。住民が逃げていったからであろう。これが「神武東征＝逃亡」である。

□「神武東征（逃亡）」の時期……260年～265年ころであろう。

- 勝利した「壹與」は「266年」に朝貢している。

### (3) 伊都国と五瀬命

「伊都国」は漢音で読むと「イト国」であるが、呉音で読むと「イツ国」である。

|       | 漢音 | 呉音 |
|-------|----|----|
| ■ 「伊」 | イ  | イ  |
| ■ 「都」 | ト  | ツ  |

「都」は『古事記』、『日本書紀』でも、また『万葉集』でも「ツ」である。

神武天皇の兄は「五瀬命（イツセのみこと）」である。「イツ」は「伊都国（イツ国）」の「イツ」であろう。

□ 「五瀬（イツセ）命」 = 「伊都国の瀬（イツの瀬）」であろう。

## 2 神武東征のルート

### (1) 「日下（くさか）」と河内湖

「神武東征」の一行は伊都国を出発して瀬戸内海を通り大阪へ来る。

「浪速（難波）」の「草香=日下（くさか）」で登美の那賀須泥毘古（ながすねひこ）と戦う。

- 邪流而上、径至河内国草香邑青雲白肩之津。 『日本書紀』

（訳）川を遡（さかのぼ）りて、ただちに河内国の草香邑の青雲の白肩津に至る。

- 経浪速之渡而、泊青雲之白肩津。此時、登美能那賀須泥毘古、興軍待向以戰。爾取所入御船之楯而下立。故、號其地謂楯津。於今者日下之蓼津也。

『古事記』

（訳）浪速の渡りを経て青雲の白肩津に泊まる。この時、登美の那賀須泥毘古（ながすねひこ）が軍を興し、待ち向かい戦う。ここに御船に入っていた楯を取りて下りて立てる。故、其の地を楯津という。今は日下（くさか）の蓼津（たでつ）というなり。

東大阪市に日下町がある。「草香=日下（くさか）」であろう。

しかし日下は生駒山の西麓にあり、陸地である。船で行けるようなところではない。本居宣長も『古事記伝』の中で次のように指摘している。

「遡流而上（カハヨリサカノボリテ）」と云ることいと心得ず。草香はたとひ河内の草香にしても難波より遡流て至る処にあらず。甚だ地理にたがえり。

『古事記伝』

ところが古代には河内湖があった。『大阪府史 第一巻』に梶山彦太郎・市原実両氏の研究論文（『地質学論集』第7号、1972年）が引用されている。

○後氷河期の大坂平野は九つの時代に区分される。

- ①古大阪平野の時代 (約2万年前～9000年前)
- ②古河内平野の時代 (約9000年前)
- ③河内湾Ⅰの時代 (約7000～6000年前)
- ④河内湾Ⅱの時代 (約5000～4000年前)
- ⑤河内潟の時代 (約3000～2000年前)
- ⑥河内湖Ⅰの時代 (約1800～1600年前)
- ⑦河内湖Ⅱの時代 (1600年前以後)
- ⑧大阪平野Ⅰの時代
- ⑨大阪平野Ⅱの時代

神武東征は「260～265年」頃である。今から約1700年前である。「⑥河内湖Ⅰの時代」にあたる。

図28 河内湖の主要遺跡分布図（『古代史を歩く⑦ 河内』より）

□船で日下（草香）まで行けた。

- 『古事記』は史実を正確に伝えている。

(2) 「熊野」

『古事記』『日本書紀』は、日下から「熊野」に来たと記す。「熊野」は「和歌山県新宮市」に比定されている。しかし「新宮市」から「吉野川」へはとても行けるような道はない。

○「熊野」＝海南市である。

「神武天皇」の一行は「熊野（海南市）」から「貴志川」を下って「紀ノ川」へ出ている。

図29 熊野と紀ノ川

(66号 p156)

(3) 「紀伊国伊都郡」

神武天皇の一行は丹生川の畔で土器を造り、天神地祇を祭る。長期滞在をしている。神武天皇は丹生川に「伊都国」を再興したのであろう。

『和名抄』の「紀伊国」に「伊都郡」がある。

紀伊国…伊都郡・那賀郡・名草郡・海部郡・在田郡・日高郡・牟呂郡  
『和名抄』

「伊都郡」は「伊都国」から付けられた名前であろう。神武天皇は丹生川に本営を置いて長期間滞在している。「丹生川」のあるところが「伊都郡」になっている（図29）。

和歌山県に「伊都郡」があるのは「神武東征」が史実であり、出発地が伊都国である証拠である。

#### (4) 神武天皇の墓

神武天皇は畝傍山の東南の地に都を定めたとある。死去すると畝傍山の北、または東北の陵に葬られる。

○神武天皇陵と「畝傍」

- 天皇、橿原宮に崩じぬ。畝傍山の東北の陵に葬す。　　『日本書紀』
- 畝火（うねび）の白梼原（しらかしはら）宮に座して天下を治める。  
(中略) 御陵は畝火山の北方の白梼の尾の上に在り。　　『古事記』

「畝傍山（畝火山）」は「鳥見山（外山）」である。「神武天皇陵」は「桜井茶臼山古墳」である。

80面以上の鏡が出土している。「倭人（天氏）」の墓である証拠である。

図30 桜井茶臼山古墳

(66号 p161)

#### (5) 「神武東征」の検証（1）

神武天皇の一行は紀ノ川から「奈良県宇陀郡」に来る。「宇陀郡菟田野町」に「見田・大沢4号墳」がある。「三種の神器（鏡・剣・勾玉）」が出土しており、鏡は絹で包まれていた。弥生時代の近畿地方には絹はない。弥生時代に絹があるのは北部九州だけである。見田・大沢4号墳の「三種神器」は北部九州から持ってきたものであることがわかる。

「三種神器」は伊都国の祭器である。見田・大沢4号墳は伊都国から来た人の墓であることを示している。

寺沢薰氏は「見田・大沢4号墳」の年代について「土器からは庄内3式～布留0式でしょう。全体を考えると布留0式だと思っております」と述べている（66号）。

「布留0式」は「260年～280年」頃である。見田・大沢4号墳の年代は「260年～280年」頃である。神武東征の時期に合致する。

#### (6) 「神武東征」の検証 (2)

『古事記』『日本書紀』の「神武東征」は息子（五瀬命や神武天皇等）ばかりが登場する。ところが『宮下文書』では父「第五十一代神皇」が出てくる。

父神皇は五瀬命が死去したことを聞き「伊瀬崎の多気の宮に着御ましましき」とある。「伊瀬崎の多気」 = 「三重県多気町」であろう。

また「東国の軍兵、海上を渡り赴き合わせる宮を度会の宮」という。「伊瀬の度会」とも記す。「三重県度会町」であろう。「伊瀬」 = 「伊勢」である。父神皇は「三重県」に来ている。

「伊勢市」の隣に「志摩市」がある。「伊勢・志摩」である。

神皇は「伊都国王権」の王である。「伊都（国）」の北には「志摩」がある。「糸島（伊都・志摩）」である。「志摩」は『三国志』倭人伝に「其餘旁国遠絶、不可得詳。次有斯馬国」と出てくる。「志摩」 = 「斯馬（国）」である。

「伊都国」はまた「伊勢」とも言われた。『桓檀古記』に次のような記述がある。

日本は旧（もと）伊国有り。亦伊勢という。倭と同隣す。

伊都国は筑紫に在り。亦即ち日向国なり。是より以東、倭に属す。

『桓檀古記』

「伊国（伊都国）は亦伊勢という」とある。

「伊都国と斯馬国」は「伊勢・志摩」である。三重県の「伊勢・志摩」と一致する。

「神武東征（逃亡）」の時、父「神皇」は「伊都国・斯馬国」の人々を連れて安住の地を求めて三重県に来ている。そこに故郷と同じ「伊勢・志摩」という地名を付けた。

三重県に「伊勢・志摩」があるのは「伊都国・斯馬国」の人々が移り住んだ証拠である。

□父神皇は戦死して五十鈴川に埋葬される。

■父神皇の祭祀が「伊勢神宮」の起源である。

■伊都国に五十鈴川がある。伊都国の人々が三重県に来て同じ名前を付けている。

（「神武東征（逃亡）」については46号、47号参照）

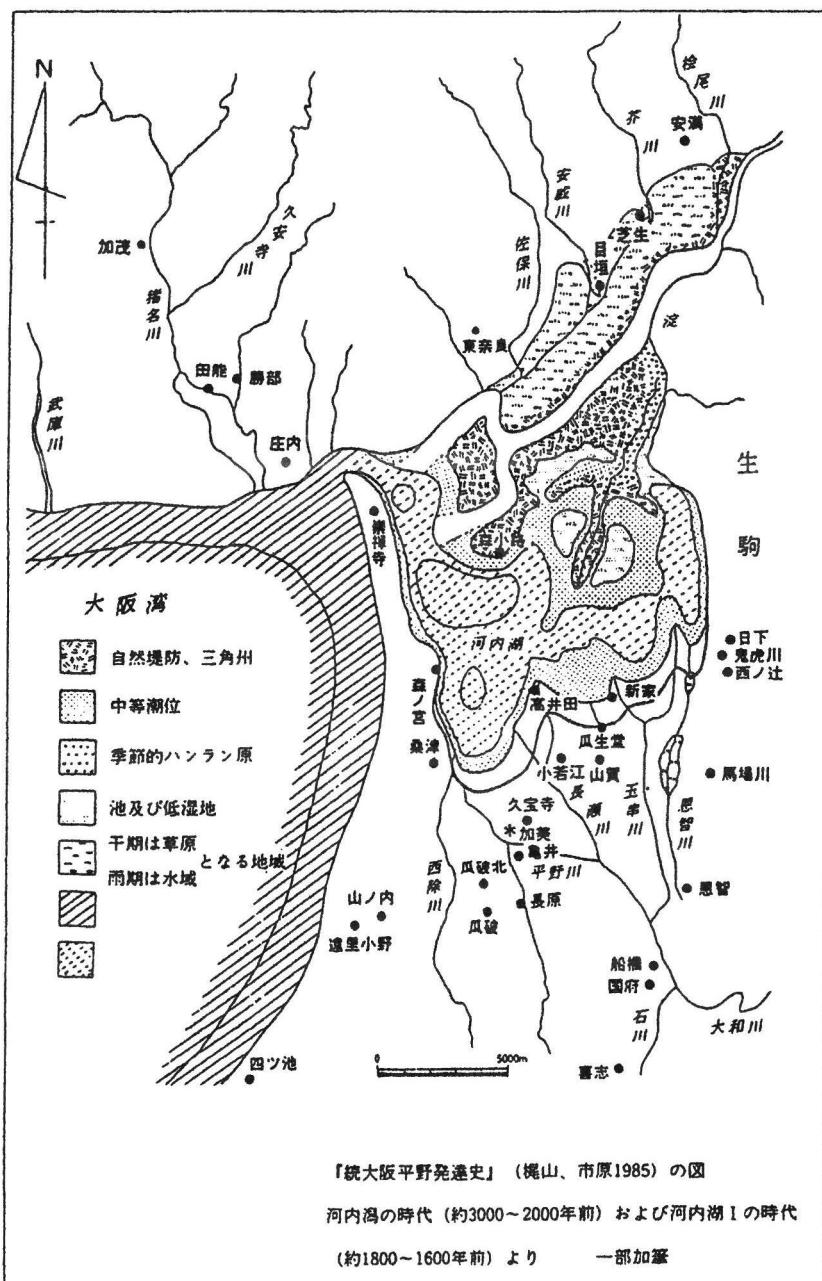


図28 河内湖の主要遺跡分布図（『古代史を歩く⑦ 河内』より）

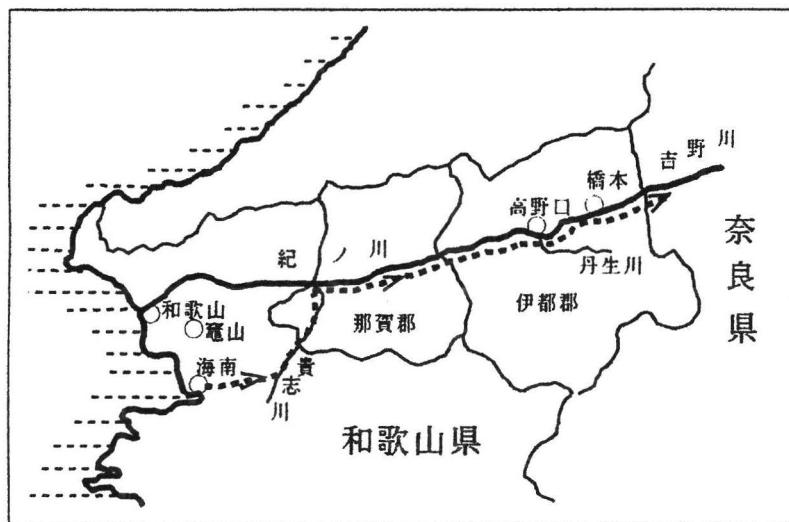


図29 熊野と紀ノ川

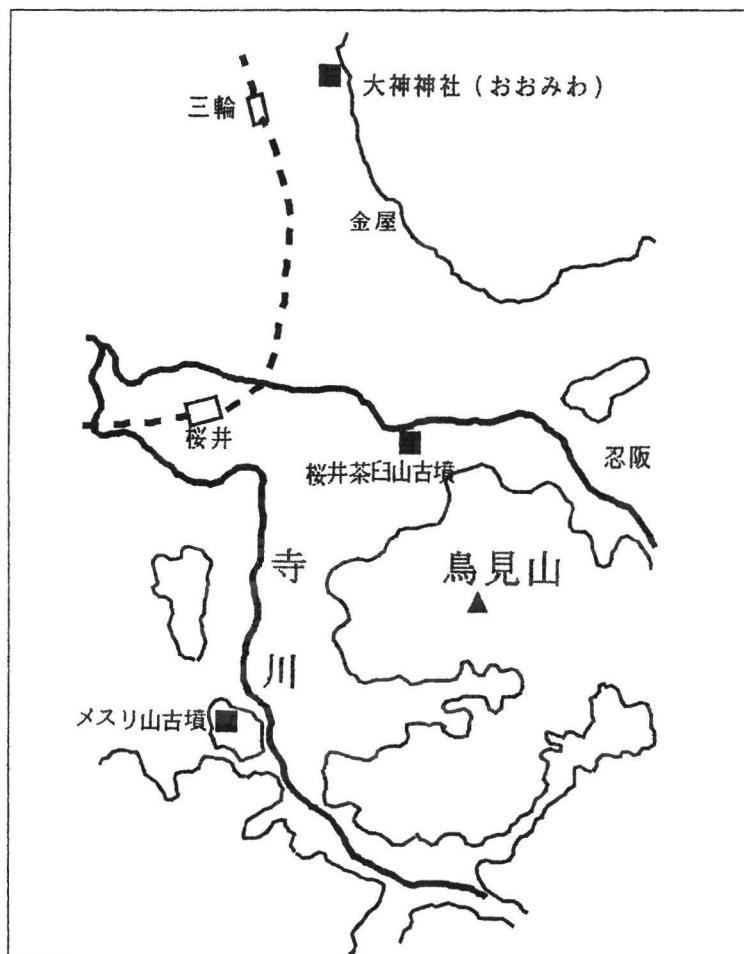


図30 桜井茶臼山古墳